

コラム 相談室の窓から

平成29年10月号

ふれあいルームでは、跡見学園女子大学文学部臨床心理学科の学生さん達のカウンセリング実習が始まっています。学習支援を行ったり、さまざまな体験活動に取り組んだりしています。

そこで9月はお月見にちなんで、みたらしだんご作りに挑戦しました。白玉を耳たぶの硬さにまで練って、まあるくする作業は、小さい頃の粘土遊びやままごとのようです。キャーキャーと楽しみましたが、ふれあいルームのなかは粉だらけでした。でもとってもおいしかったです。(黒蜜とあんこもありました。)

今年の中秋の名月は10月4日(水)ですが、満月になるのは10月6日(金)です。十三夜なんですね。おだんごを13個食べないと…



我が子が読み書きの苦手な子だったら？

小学校高学年のDさんはおとなしい女の子です。友達の数に限られています。仲良くしていますし、学校生活で先生を困らせるようなことはありません。でも1年生の時から国語の音読と漢字が大変苦手です。高学年になっても指で一文字ずつ押さえながら読むのでもたいへんたどたどしいです。漢字もなかなか覚えられず、ときどき鏡文字を書いてしまうこともあります。自分でも書くのは苦手とと思っているので、作文はもちろんのことノートを書くことも嫌がります。算数は計算問題は普通に解くことができますが、図形問題はよく理解できていません。おうちでは漢字練習を一生懸命させていますが、時間がかかるので、最近では泣いて嫌がることもあります。

○ 「努力が足りない」と責めないようにしましょう

先月ご紹介したADHDによく似た言葉にLD（学習障がい）があります。

文部科学省は次のように定義しています。「学習障がいとは、基本的には全般的な知的発達の遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算するまたは推論する能力のうち特定の

ものの習得と使用にいちじるしい困難を示すさまざまな状態をさすものである。」

LDの特徴は、できることとできないことが混在していることです。そのために「見えにくい障がい」とも言われます。

Dさんの場合、もともとの物静かな性格と相まって、本人も周囲も「努力が足りない」「怠けている」と思い込んでしまっている可能性があります。だからこそ、適切な指導を受けないと自尊心が低下し、二次障がいを起こすようになってしまいます。

○ LDについて正しく理解しましょう

LDにはいくつかのタイプがあります。最も多いタイプは、読みの障がいで、識字障がいとかディスレクシアとか呼ばれます。英語圏の人々に顕著で、アメリカでは人口のおよそ15%の人が何らかの程度でディスレクシアだと言われています。俳優のトム・クルーズもカミングアウトしています。

先述したように、LDは部分的な偏りがあることが特徴ですので、どのような偏りがあり、何を苦手としているのかを明らかにすることが大切です。そのためには専門家の検査が必要です。「障がい」とか「検査」とかいう言葉に抵抗感をもたれることもありますが、お子さんのアンバランスさを知り、その状態にあった適切な支援の在り方を探ることが、検査の目的です。

○ Dさんの特性に合った対応方法をご家庭と学校で共有しましょう

まず大切なことは、子供の困難さを周囲の大人が十分に理解することです。Dさんは、何が苦手なのか、どんなことが得意なのかを、保護者も先生も知ることです。特に、苦手な部分を努力で補わせるのではなく、得意なことを伸ばし苦手をフォローしていくという考え方が重要です。

たとえば、聞くことや読むことは苦手だけれど、見て分かることは得意だという場合は、右の写真のように簡潔な板書を先生に心がけていただくことができます。ご家庭でも日常的な行動をわかりやすく掲示するとよいでしょう。



また、音読が苦手な場合は、どこを読んでいるのか分からなくなったり、行をとばして読んだりしているので、定規を当てたりカラーペンで印を付けたりすることは効果があります。教科書を少し拡大コピーするのもよいでしょう。おうちの方の読み聞かせも有効です。

パソコンやタブレット、デジタルカメラなど情報機器を上手に活用することもできます。トム・クルーズは、台本を音読してもらい録音してセリフを覚えたそうです。

お子さんの特性にあった支援の方法を、ご家庭と学校が一緒に考え、社会生活への適応訓練をしていきましょう。